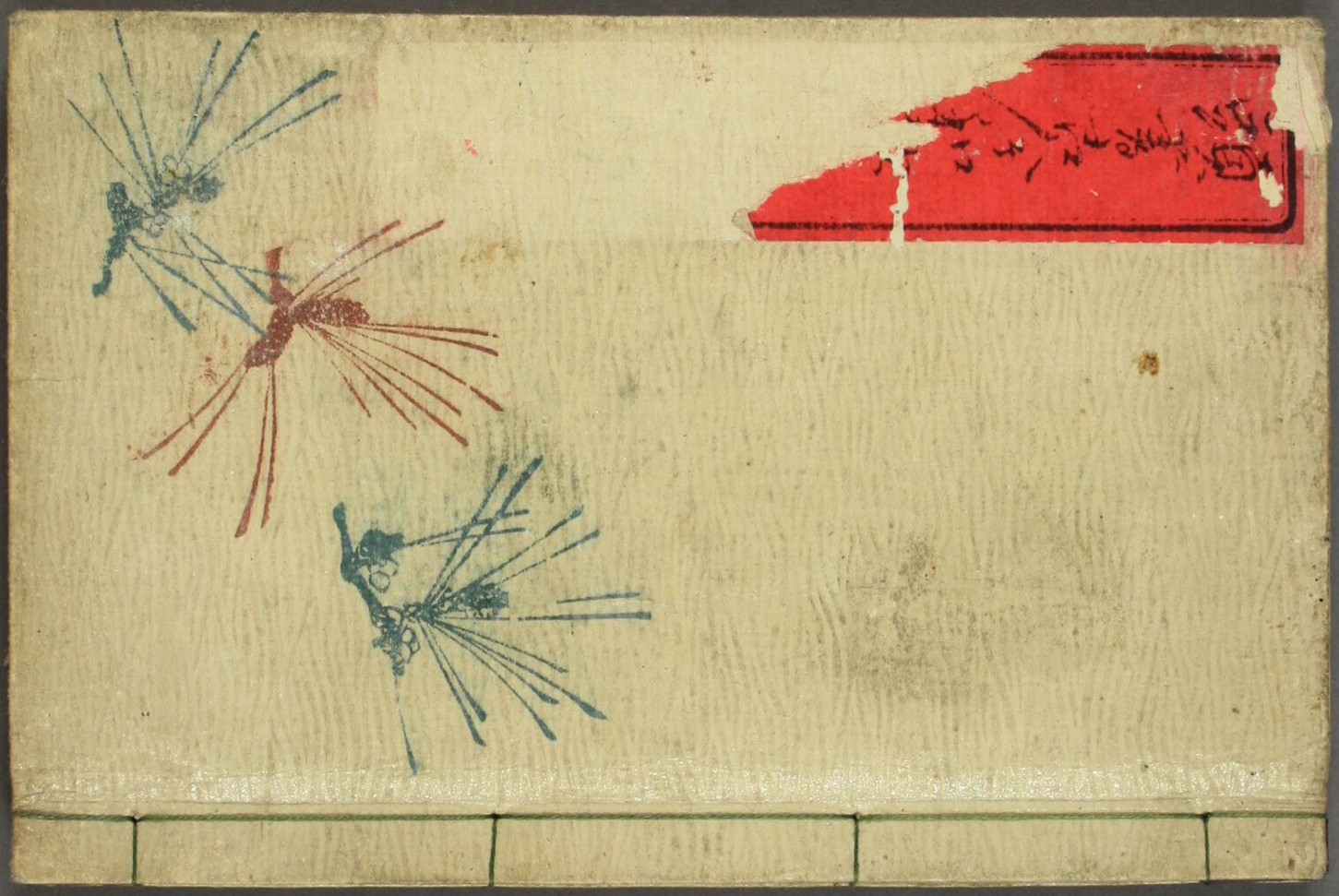

頭書古今和歌集巻第五

秋歌下

内閣文庫

帝国図書館蔵書

朝鮮

題しらず　　久登康秀

秋の夜のつゆは玉なるべし山風をあらしといふらむ

アキノヨノ　秋ノ夜ヤ木ガアヤウニミエレバ　花ナラヌ　ノヲデ山ノ

風ヲアラシトハ云ヒテアラフ　ツヨキ秋ノ風ヲアラシトハ云ヒテ　ツヨキ

風ヲ　ヒトシテ　ヒトシテ　ヒトシテ

ちはやぶる神の斎垣に木ゝ紅葉しぬべらなり竜田川

水面ニ　ヒトシテ　ヒトシテ　ヒトシテ

ちはやぶる　神の　斎垣　木ゝ　紅葉　しぬべらなり　竜田川

古今帖ニハあきやすしとあり

ゑゞハ説志のごとくなるべし　久

ろ言ン

潔ク　ヒトシテ　ヒトシテ　ヒトシテ

ちはやぶる　神の　斎垣　木ゝ　紅葉　しぬべらなり　竜田川

ハつをゑぞりてよむ
アーヨぞろくことよ
起ぞうしとこうさ
とゑでゑうぞこの
ゑるゐ帆するよ
知すしく朝康え

手向の山てあり
山城よあるといふど
こゐゐハきとあるぞ
手向手のくさる
山のよしあるべし

何ずデモホテモ　此秋ト云フ時節ガアツテ　こすろ色カカハツテ枯テ
シマウケレドモ　アノ海ノ浪ノ色バツカリガ　イツデモ同ジヤウニ咲テ
秋ト云フガナイワイ

秋の寿合しかる時かよめる

きれよしとも

まみぢゐねごき八の山ハやく風のおとろや秋をきくつてくるむ

秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云フ　モナウテ常住同ジやウチヤト
云フ常盤山デハ　時節ガイツデヤカレレイイガ　秋ヂヤト云フ八
風ノ吹ク音バカリデヨソノ気ヲステタテルデアラウカ

此所ヨりあかぎ事
まあすへきし
事もきこえバそのしめり
わくしまきふのきろ
つるめ気よ事も立て
よのて
今も二上山のひぐし
の雅よのくちき筆
アくしそことうく景
トラノイ　わくしの系
まその迎あくあどとて
ハ島よひらけてちろ
ちろし
嘉前　まてハあるる

歎しらね　　よく人ハあらず

唐くちて雁くはるろく景のわしく北系ハ立ちぶ嘉ならん
嘉カ立テ　アレ雁ガリナノワ　コレデハモウ　斤景ノ朝原ハ　紅葉
レタデアラウ

神無月あられもつまずやろふくよ出ねてきつろふ神子びのもろり
木ノ葉ヲソメル十月ノ時雨モマダフラヌニ　神ナビノ杜ハ　ハヤカヲナテ
チヤシト色ガ深クツタ

ちハやぶる神子ひ山のことこそ葉ハ旅ひくるくしくつてらふ抽筋
心ノカハリヤスイ人ニ心ヒヲカケルハアノハウナイヂヤガ　此神ナミ山

ノ紅葉モソンナモノデヤ　ホトハカケテイヅ　ホドナウチツテシ
ヤウモノヲ

夫観ノ射後待度の夫へ日あの木あり多りあ
り方よさやうなる枝のことごとくしめることをなしを
うへふさふ〜如とのごるりよりまきなるりのごるよあり

義系のうちあり

日ごろをとりきてこのもれるろふ西こそ秋のたづあるりなれ
日出一本ノ木ノ枝デヤニ西方ヘサレタ枝ガ一ツ分ラアクヤウニ色
カハツタヲ見レバ　オヨボー西カタ　秋ノ心ゼメデヤワイノ

撰さまるもの和
こそきこそふ秋風を
三方羽山より吹ゐて
めりくりこのふきの
羽の言をあの事
よこそ〜〜〜

いづ山よりまでなるこまとは山の紅葉を見くよ
ゆうゆ考
めるる

秋風の吹あり日より山ふあのあずあも色づきるまりり
秋ノタチソメタ日カラ山ニアノあずあも色づきるまりり
バ此山ノ木ドモ、ソロ〜色ガツイテキタワイ　今日ハレ
指ものつるまて瓜の寄もろう
ゆゆもとをやもせるこのれる
是夫ことれ家の事会のよあり

手枝云この後まで上句を忘ぐ〜

らゝめきれ朝に

若〜家の花ハひろをいろあゝく秋のこれをちぐまるゆ〜ん

雲ノ色ハミナ同ジツノ白イ色ヂヤニ　ドウシテ秋ノ末ノ雲ハ
ヲアノヤウニイロ〳〵ノ色ニソメルヂヤラ　千木ニひとろとのを
ひろあるものハものこまるく。
ひろいとあり。

千生忠岑

秋の夜れ雲をばつゆとおきふるく雁の涙や落べをろおしくん
秋ノ夜ノ雲ヲバ　白イ雲デソマデオイテ　別雁ノ涙
デアノ野ノ草木ヲバ　ソメルカシラヌ

駿者ノ涙

坂上人〻ノ

秋のつゆいろ〳〵ふかけば　そ山のこずえも手樽ふるこめ

上ふも時ふるそる雁
のあこぶや落つ〳〵
んとつゆよあるべ

そも〻石の〻ふ
の歌より要陳後
引ことろ小守山と
書てあり山〻つく
こころありをこど
ヨ〻〻集よ〻外出
雨へあうづることき
ゆる山とのふこころ
ヨてとあり

秋ノ雲ハ夕ベ白イ物ヲチヤトヅカリ色ヲテ居ルガサウデハナイガ
ウデ　色マイカウテオクカウナ　ソレデコソ　染ツタ山ノ木ノ
葉ガアノヤウニサマ〻〻ノ色デアラウ

こそ〻山のをとりあくくよあら

つるの四位

春〻雲のもあゞれもいくもの山ゝを紫のこゝ〻色づきふるり
雲モ時雨モキツウモルコノ山ノ木ドモハ下葉マデノコラズ色
ヅイタワイ

秋のうこゝ〻くよあら　わうハう社めとゆく

ちさとり山ハ山科ヨ　雨ふれど雲まらでをうさとり山ハ山での紅葉を見るなん

カサトリ山ハ傘ヲモツト云名ナレバ　雨ガフツテモ雲ホド

モモリハ　スマイニドウ　シテアノヤウニ　紅葉シソメタコトヤラ

秋のやうにあうとをあうろ射よいづきのうちの紅

葉と見るまである　つゝぬき

あづまハ櫻をそめ

ありこのよのめうく　ちるもやぶる秋のいづきよちふ葛も枯まおあづまうろひよりう

あいぜずしとをあ

づまいつもあうこ

ハをうぐず

コレハアア神社ノイガキニハウテアル葛ナレバ　神ノ九守リデ　色ハカハ

リソモノイモノナレド　ソレデモ　秋ニハエコタヘスニ色ガカハツタワイ

見ヨみこの家社ヨ合まるめる

雨ふれバとハ沿ヲ云

とつてんをくおけ

るめく

たぐ見ね

雨ふれバ入ヲミ山のとくぢ紅ふハ行ふ人のそでさえぞてくる

○

一　笠取山ノ紅葉ハコトノ外コウ深テ往来ノ人ノ袖ニデサ

色ガガヤイテテリアヌ

宮年ノ頃時ヲさいの宮の会ハ方

ものと人をこ

うぎうの色とハ

ちーわヨ深つく

しーうる

ちくねどるかねてををきもくぢ紅ふハ々ハうぎうれ色とうれバ

○　此紅葉ヲ見ルバ　アダチリハセ子ヒ　チラヌサキカラサ惜イ

今ハ

モウ十分ニソメタレバ　オツケチルデアラウーめへバサ

さほ山ハ春日山の西ニあり
立つる錦のころを錦を裁たつる(タツ)をてそめしとも云ハる(スギ)くれなゐ色まさるよその羽かくて見よいことなり

やまとの国にまかりける時さほ山に霧のたてりけるを見てよめる　きのとものり

誰ためのにしきなれバか秋霧のさほの山べを立かくすらん

○此サホ山ノ紅葉ハ　タガタメニトテ　アノヤウニ大切ニスル錦デ　アノヤウニ霧ガカクシテ　人ニモ見セヌ　ヤラ　セツカク紅葉ヲ見ヤウト思フテキタニ

是貞のみこの家の歌合の歌

よみ人しらず

秋霧ハけさハなたちそ佐保山のはゝそのもみぢよそにても見ん

霧ハドウゾソコサハ立テクルナイ　アノサホ山ノ柞ノ紅葉ヲヨソカラナリトモ見ヤウニ

ゝすきとハはゝそのきとむへてよめるのくろきと云物ハ秋を惜む心ふかこのうたハ数くまじく

秋の哥とてよめる　坂上これのり

さほ山のはゝその色ハうすけれど秋ハ深くもなりにけるかな

○ソウタイ柞ノ木ト云モノハナニホド深テモ色ノアマリ濃ウハナラヌ物ナレバ今此サホ山ノ柞モ色ハウスウテ　深ウハナイケレドモ　アノケシキヲ見レバ　サテ〳〵マア秋ハイカウ深ウナツタコトカナ

セニザイ
前栽ハ草木うゑるところを云歌の詞詞書ありて云

人のせんざいにきくにむすびつけてうゑける歌

ハこのころよりの歌
ならひなり

ありふる社あるいくの例に

酒

そ多くそ多バ枯子キ附や咲ざくん茎こそ茎の根さへ拾めや

○カウシテノウヒテサヘオイタエヒバコレカラ後秋ト云時ガナイ

コトカアツタラバコノ中カヌ丁モアラウカミラヌガ 秋ト云時節

サヘアラバ咲メ丁云丁ハアル丁イ 此今年ノ花コソ初テ見ヘバウ

ケレ 根ニデガ拾ウカ根ハカレハセヲヒバ イツマデモ毎年秋ハ

咲タデアラウハサテ

宮中ノ附きくの花をよませられける

オヨヒセナサレタ

ゆく〳〵行朝長

久〳〵この事ハ上ゆく〳〵見る菊ハ丁ハ星まで咲やまゆくれ花ゆる

○カヤウニ禁中デアル人ニスル菊花ハ 西ゆく上テ ゴザリマスニヨツテ

天ノ星ガヤトサトリチガヘラレマスルワイ

この歌ハまゴ殿上ゆるされざり殿附よりゆ

ゆくれゆく法ゆうまゆくるふん

是ハこの花の散れ方合のうさ

紀友則

雲の子ゆくゆくとうてゆざくん菊の花老せぬ秋の久〳〵ゆくゆ

○菊ノ雲ハ寿命ヲ長ウスルモノヂヤ キケバ イツマデモ年ノ

是ハゆくゆくまで長生

この人菊を愛して年ながらします

又菊のあとのこそ

百歳ゆきうあり

この注ハ後のはゑ

のゆくざあり

らくする人多しと
いへるゆゑに千年と
して折てかざさん
べしといへり菊ハかう
ぜのものなればの
のすなをとよむべきよ
う

ヨロズ秋ヲ久シウ重子テ長生(ナガイキ)ヲスルヤウニ此菊ノ花ヲ壽モ
ソノマヽデ折テ頭ヘサヽウ

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　大江千里

うゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し

○春ウヱタ時ハ早ウ咲ケカシ秋ニナイトマチドホニ思フタ
菊ガマア盛リガ過テモウ色ノカハッテシマウ時節ニナッテ
コノヤウニナッタノヲ見ヤウトハ思フタカイ

あきくるあきに秋にあはんとして
なからむものをといへるなり。

○千載集　結句や
めどもハやまのま

秋風の吹上といふ事
の波のよするハいぞ
くる

おなじ御時せられける菊合にすはまをつくりて菊
の花うゑたりけるにくはへたりける歌ふきあげ此
濱(ハマ)のかたに菊植たりけるによめる

すがはらの朝臣

秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

○秋風ノフク吹上(キ)ノ濱ニアル　アノ白イ菊ノ花ハ　花カサウデハナ
イカ　浪ノヨセルノカ　風ガフクナレバ浪ノヨセルヤウニモ見エルガ

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

くゝ[illegible]人山ヨ今ク人の墓
とおをろろろ[illegible]
の柄の打ちをぎ
ろきくゝるを云
てとあくまろべー

くゝ[illegible]月九月カ[illegible]
人九月カ[illegible]
の菊をめぐる[illegible]
あくり[illegible]

ぬれて[illegible]山路のきくれ[illegible]あのまふいつちく年を経ハ[illegible]ん

○在所ヘカヘテ見タレバモハヤチ年モ[illegible]タヤウスヂヤガ才ハ仙人ノ久シクヘイクトテ　山ノ[illegible]菊花ノ中ヲ分テイラ其菜ノ香ニキル物ノヌレタリキス間ダホドノチットマデアツタニイツノマニアチ年モ名タツヤラ

きくの花のあとふく人の人まてるかさをとあくら

らるけく

花見つゝ人まつ時ハ名ろ人の袖ろとのこそ[illegible]まくれける

○庭ノ菊ノ花ヲ見テ[illegible]クル人ヲ待テ居ルトキニハ　ソノ白イ花

ガソノクル人ノ白イ衣ノ袖ノヤウニ見エテ　ヒタモノ　ソチヤガトリチガヘラルヽウイ

大澤の池れくゝふ菊うゑたるをとあくら

一ものとゝ[illegible]ひ〜きくをおろさハの池の底ふもたれろ名ろん

○多タ一本ヂヤトゾフタ菊ノ花チヤニ　アレ氏池ノ底ニモアルワアハ誰ガ池ノ底ハモウアタフヤラ　イヤ〜ヨウスレバ影ノウツタ

ノヂヤ　ろ子ガそこれまでのその歌ハ　こるろれすノ名ノくゝ[illegible]

世の中ハ[illegible]ろ子きとをゆひろるをりまきくのゼ[illegible]

見てよあくら

はゝやき

[illegible]ハ[illegible]をろこセて
おこモー其使白衣
と云ふ[illegible]ふ詩
子白衣ホ[illegible]
[illegible]
の袖とあくり

秋のきくふるふくぎうハかざしとなるよりさきに死とあらそふぬ

○菊花ヲカウ受テアルウチハ茂ルゴトハ カザレテアルバウ

アノ花ヨリサキハ死ホウモシレヌ 家ガチヤキノヲ アノバイデハ

白菊のおもをよめる 元の内ちうね

ムあそふをくばやをくん初霜のおきまどハせる老の菊の花

○アヤツニ初霜ガオイテ 花ヤウニ表ヤラシレヌヤウニ ガウア

元元 白イ菊ノ花ハタイガイスイリヤウデ ヨクバ 折モリセウ

ガナカ〳〵見ガテイ、コデハナイ

是をこのこの秋は高台のもと

よこ人〳〵

秋のきくをバ一ヒヤフ〳〵ビヤウ 高と二ヤ アリ

○ハジメノホド、ハトント格別ニ色ノカハツタアノ菊ノ花ハ

本ノ花ト八月エヌ一年三度サイタ花ガヤトサカ、元、

俳我ト白ヲ遠ク おもヘ〳〵

仁和ちるふきくれなめり〳〵ちる射ヨ高ちるもくきれ

とおもヘ〳〵ル 是ハよくてきりのる

平さだ人

秋とおきて時ちくあり〳〵れきくのもとのろふ〳〵ふ毛のやまゝれ

仁和ちハ光孝天皇の仁和四年ヨ京の西山ホ紙〳〵れ〳〵ヨリ紅葉ちといふ

○キクノ花ハ ウツロイヤスシテカラ 又カヤウニ始メヨリハ色ガマガリ
リヤスレバ 秋ノ下サカリバカリデハゴザリヤセヌ 秋ガスギテカラ
又ハイチド 盛リノ時節ガサゴザリマス 恐レナガラ 陛下
ノ御モコノ業ノ始ノトホリト存ジまリマス
人の都ゆくるきくの色をうつしうゑうるをよ
めるうた
ちくもゆえ

○菊ノ花ハ始メ淡色ナレバ、ヤドガ替ツテウツクタレバ 所ノ多
ツタバカリガ花ノ色ニデガサ アヤウニウツテカハツタワイ

ろろふとろろふ 上総
をろろろふるところ
をろろろふれば四言
もてあそぶこと

咲そめ初うつれば色さへ
ことそうろひあるを

ちくもゆえ

ベミハベくしてと
ち帳よりなびき
あるよろ

蘭燈ハ才学ありて能ある人にて山里
にすまひのれるもの来
山住士と名づけうる
れるとこ関東まで
ちくうつのあるこ
ろまでよまれしるる
ぶ

鄙ならず

ちとせ人をうつ

佐保山のもろそれもちろそなぬぐ秋さへ人よと照す月かげ

○アノサホ山ノ秋ノ木 モミヂウガ オツシテ来ラウヤウニ見エテ
ヨツテ 見バカリデナクニ 夜ヒ人ニ見ヨウニエテ アヤウニ月ガ
アカイ

ちやづ人名ゝうゝ佐ろうまつこで山里ふかりゝ佐りけ

ろよあるろ

義孝関雄

おゝ山のいたろ紅もこぢ葉ぬぬべしてろ日の光の見る時ろこと

○此ヤウニ高ク岩ノ築地ノヤウニツイテアル陰ニハ奥山ノ紅葉

八日ノ光ヲ見ル時モナレバ春モ近シトテアラワレタル人ガ
ヲシイオボガ身ヲウケモテヲド此紅葉ト月ビイヂヤ

歌〜〜〜〜

よろこび人あるべし

三田川をこぎこぐ舟のあがるあり人もこぐ人ハ務中やたこえ人ハ

○三田川ハ紅葉ガチリシダレテ今嵐中流レルヤウニ見ルハ

ソレデハ今渡ツタナズ　ツタラ務ガ　手カラキレルデ　アラウ

カイ

はるばるあるこうとれば人あるべし　あんやはる

ちつくりハ　ひとちら　ちるの　ちるの　ちるの　ちるの　ちるの

まの葉の風ちりぬ　ふもとちりのを　ちて　ちる　ちる　ちる

あのぐんハ　ぐんぐん　万葉　ふと　ちる　ちる　ちる

ずこの葉ハ　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

○此川ニ紅葉ガナカレル　神ビヲ小堂ニ三時雨カシテ風ガフケ

ウチ　時ニ　ちるくつろぎ　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

おくハ　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

○紅葉ハモウ葉デシミウタカ　今カラモ　葉ダ紅葉ノ葉ヲ

時ニ　ハ落葉ヲチリ　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

ルナリ　コレ山オロシノ風ヨ　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

紅葉ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

秋風ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる　ちる

四ニ添ノ方乗ル表

○秋風ニ立コタヘズニ散ルアノ紅葉ノ　アチヤコチヤ散テイテ　ドコ行ク方ノ定ニラヌヤウニ　オガ身モ行末ドウナルコヤラレレガ　サカナシイ

枝ハ葉ノ色ヲ変ズ　まぐの説あれども　ウ枝のもゝ　ずいぶんくも枝ま　ありてとの色

枝ハキヨ紅葉ハ色ヲ　○物ガナシイ時セツニハ　紅葉ハ庭ニ　ツヽ散リ　シイタ落葉ヲ　ヨミ合テタレモ　ヨタテテ　ル人ハナシ　サテモ　何モ　カモノ白ウテサビシイコトカナ　この色ヲ　ふんをつくで　餅ハ　ヨ初白と　枝の葉ハ　ヨ　ぬとの　ハ　ぬ　ぐ〳〵き　附ヨ　ものゝ　ふ　ヨ　ゆ　ゆ　ゆ

ふゝわけてさゝふやとハ人ハ　ものゝ　ふ　ヨ　ゆ　ゆ　ゆ

○アノ家ヘハイル度ハアノヤウニ紅葉ガチリシイテ　タレモ人ノシラヌヤウニ　ヨミ合テコヌヤウニト　陰シテアル度チヤニ　リウトウ　ソレヲヨミ合テ　今サラ足舞ヒベキヨカ　サウトウ　ガラ　ヨミ合テ足舞ハウヤウハナイ

枝の月山ざやふてゝセるハおつるのこゝろの数をゝ人よしら

○月ノアヤウニ山ヲサヤカニテラスハオチル紅葉ノ数ハイクツヂヤトヱコトヲトクト足ヨトテノヨカヤ

色のちがき　葉の　の色こ

○風ノ色ハちがきホヨ　ハ枝のこのハ　ハちれバ　ノルノ

白雲天の詩ニ織霜織雪ノ三林錦トアル雪ヒトシルアルベシ

○風ハ魚ハナイモノ雨ヤニアノヤウニ風ノ吹タ色ガ イロ〳〵ニ見エル

ハドウシタコトカトゼヘバ 紅葉ノ千ユヱニ雨ヤワイ

セキを

雪ノくそ雪のぬきこそあるとしし山の雪れおれバくちる

○山ノ紅葉ハ雪ヤ雪ニ染ツテ ソシテ雪ノイウナルギヤス

ヤ雪ト雪トガ雪ドカ雪ノハタラ織ル竪ト横トノ糸イウナ物デ

ヤガツ雪ト雪トノタテヨコノ糸カサ弱イサウナ ソシユヱカシ

テアノ紅葉ノ雪ノカ織ルカトゼヘバヤ片方カラ破レサウニチリス

うすん白人のおれぐはくこそよきる

佳色通服

わび人のヨキそこそよることれ本ハ移リツケ多く紅葉葉ノ

ノ〳〵ヒナ身ハ ヒニカラナニデナ〳〵ヒナモカノコハ移モシ

イヨイ陰ダヤトゼフノ見タテ〳〵立ヨハコノ本ハ ヨニモ早ウ

紅葉ガ初テヒニウテ トリウテ早ウ

二條后の春宮ヒこやすあと中ノ時ハ五月雨ハ

ヨたつくハ川ヨ紅葉ふあげれこそこそ立りけるか

と歌ふくよあるる そそい

ちくこぢ葉のあげれてとあるこれとハ紅ふき波や立〳〵人

たゞこそこてハこやすらひてあるこそこそ」

議ヨヨ左ひハ木下ヨ雨ひくこそこそ如

くせすヨろづヨびくる人のヨヨ木下

ハ紅葉ヨ左の切ゲるくちこそ

何ふくもんヨ雨ハ人を見び人ヨ

六帖よこのゆきこまま
かこくれなゐのまゝ
ることそ本の名の〳〵
ふもおきさまさるら
こよめくる絞染な
れバこそ本のむやふ
もとハ久方のあくぐ
るまわかむ和歌ハる
と云詞ますかなよ
てくりぬてるるとく
とよめるしと書ひ置
まべし

此立田川ノ紅葉ガ ソレト下ヘ流レテイテ 上ル湊ノアタリニハ ミツ
カイナ色ノヨイ浪ガタツデアラウカ

おりひとの翻意

ちはやぶる神代もきかず立田川からくれなゐに水くゝるとハ

此立田川ハ モミヂガ紅葉ノ流レルトコロヲ見バ トント紅鹿子
紅シボリ トミエルワイ サテ〳〵奇妙ナコトカナ 神代ニハ丗〳〵
ノキメウナ事ドガアツタデヤガ
ハヤウニ川水ヲ 紅ノクヽリ
ゾメニシタトイフ事ハ 神代ニモイツカウキカヌコトヂヤ
ちはやぶるハ神の枕詞 今式部し
ふもかくて纐纈といへるこれ也

摩子散をもちけさ
まくらだ山ゟきき
とよもきう
古事ヲ八座をまう
れずとあり
飛鳥の詠画之

是ヨリ二首ハ亭子院の歌合の歌

こらし紀の朝臣

都来つる雪ハ木毎に花ぞ咲くいづれを梅とわきて折らまし
此クラブ山ノ木ドモノコノハノ裏中チリレガウイデ 今一トおツテ来
タガモ ドチカラチタヤラシレヌ

みつね

詠みびとの山を秋ゆけバ錦きちぬる心ちこそすれ
今秋ノコロ此神ナビノミムロノ山ヲ通レバ 紅葉ガ散リかゝルデ
錦ヲ着ルコヽロモチガサスルワイ
よく枝ニさくる詩ありて八錦
摩子ハこの秋ゟきさがよめり

つらゆき

北山にもみぢをらむとてまかれりける時によめる

見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

トンデモセヌ事ヂヤ ヲバ夜ルノ錦トいふモノダガ 見ル人モナケレバ
此オクノ山ニ散テシマウタ奥山ノ紅葉ハ ナンボ見ル手デモ
ノヤウデモ マコトニ夜ノ錦ヂヤワイ

秋のうた　かねみの王

竜田姫たむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ

立田姫ハ秋振ガヤカ ソレデモ又ル手向ナサル神様ガアルヤラ
コノ此自身ノ御染ナサッタ紅葉ガ アレトニヽ手向ノ幣ヲチラス

小野といふ所にすみ侍りける時もみぢを見て
よめる　つらゆき

秋の山もみぢをぬさとたむくればすむ我さへぞ旅心ちする

秋ノ山デハアレアノヤウニ 紅葉ガチルヤウスガ テンツト旅ノ
道クダリ神ヘ幣ヲチラスレテ手向デユクヤウニ見エルニヨッテ
住デ居ルワシマデガドウヤラ旅ノヤウナ心チガスル

今の事より見てとあるゑとゝろ一古ゆまハ
こゝてとゝあり

立田川いかゝゝ
若上の事ハとゝ
ハあるまとうとゝ
ゝ事ゝとゝとゝ
ゝ事ゝとゝ
又ゝれ事ゝ
若ハ
すゝ
ゝ事ゝ
ゝ事ゝ
ゝ事ゝ
ゝ事ゝ

新撰万葉集三の百
ゝ八未の百舟
ゝ百舟
ゝ百舟
ゝ百舟
ゝ百舟

伊勢ゝ
きゝゝ
ゝ
ゝ
ゝ

神なびの山をゆこて龍田川を渡まるゝ船よりあとゝ

のあがれるとあるゝ　きよらのみやび

神なびの山をゆこて龍田川を渡まるゝ船よりあとゝ

コヽモ今神ナビ山ヲ色デキテ立田川ニ渡ルガ　暮ニ行秋ハ
ソノ中ノデ神ノコヽハ神ナビ山ノ紅葉ハモウ盛デ　ソノハスエテ
西ヘユクハ　アレアノヤウニ　紅葉ノスサブ立田川ヘサヤ〻ヒエス
神なび山ハ立田ノ西ニ　立田川ハその西ヲ　流ル高
上流ノ方ニ　流ノあるこゝのまゝ別ニ考ヘあり
コヽ神なび山ハ　ソノ中ノ　ヒトツ　考ヘ　武蔵野のゆ
ゝ考ヘ

宮平ノ射きさいの宮のうゝ

後京極

白雲とゝ秋のこのもの〻とあまの原やる船とゝ

浪ノ上ヘ木葉ノ乱テウイテアルハ　猟師ノ流シタ船デハナイ

カトサ見エル

立田川のゆうあくよある

坂上是則

ゝとゝ秋ゝのゝ立田川ゝ秋ゝ

木葉青ノハ色ノカハルデ秋ガシレルガ　水青イハ色ノカハ

ニヲヌモノナレバ　秋ガレヌニ　今ゾ立田川ノ水ヲクレバ　紅葉ガ流レルデ
秋ガレヤトヲフガレレタ　モレ出ヤウニ　紅葉チガルルノガナイナラバ　水
ノ秋ヲバドウシテ誰ヒカレラウゾ　シルモノハアルマイ
あぐの山ニ　ふてよあり　ちるこちのつくき
山ノ上ノ風ノ吹ケルモ　あぐれもあへぬ　紅葉あり　多
山川ヘアレ風ガモテキテ　レガラミヲカケタ　ヒエルハ　エナガレモ
セズニトヽシテアル　紅葉チヤワイ　アレハ風ガフヂテ　ヒリウモミヂ
ガチリテセキカケ〳〵流レテクルニヨツテサワ〳〵ト下ヘ　上流ヘテハ
イカズニアノトホリニガラミヤウニヨドムチヤ

あぐ　こちのて　八幡
まて　ちの　詞　よき
ぐれ　もそ　ぬ　ちく
ぐ〳〵

ニテ
湧レバ　ガ　紅葉の　ふ　風
よ　ふ　き　も　こ　ち　の　ひ　て
池の　面　と　ち　ち

池ノ面ヲウツシテ　紅葉ノ　ちるを　とよめる

ふ　ち

風ガフケバ　落ちるもこちぢ　紅葉　あり　清　こち　紅　紅　人　座　よ　ア　冬　不　清　ち
風ガフケバ　チトヅツロ〳〵　紅葉ガチリカラ　多ガ　底　池　水ガキヨカニ
一ダイラス　ニ枝ニテル　紅葉ノ影ニデカ　底ヘ　ヨウ　ウゾ　ラ　ハヤ　人　分　チ
ツタヤウニ　見エル

真ヲ洗ノ　ア　風ノ　移ヨ　川　ち　ち　ん　ち　す　ち　人　の　ち　こ
ちのちら　ホ　れ　下　ホ　ち　ち　ひ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
まひ　ち　れ　ば　つ　ち　ち　ま　ア　ち　ち

オヨマセ

又そこのをハとこ云
ホおまど

うゑわと、えぶきて
まこ子をハ寄仮ふて
をのぐくと子山方巣
ホ借事こうゑくこれ
う田ホのまきき黒ハ秋
まふりて名田おま
ようそうこうまめの稲
を低まてそこよ稲

たちとまり足一とを流くんをぶばゝ毒と学ともあハまさらば

シバラク立上ツテアノ紅葉ヲ見テカラ氏川ハ渡ラウ　雨ガフレバ水

ガマシテ川ガ渡ラレヌ事ガ　紅葉ハ雨ノヤウニナボフツタトテモ

水ハマシハスマイホドニ

是皮ここの家れ方合のこの

ふぐろね

山田のる秋のうゑホおく毒ハいるおわセ毒の涙ありけを

秋ノコロ山ノ田ノ番ヲスル氏ハ屋ヘヨリウニ毒ノ毛ノ一タハ稲穂セ

鳥カ此ゴ只来テシレデウ鳴ダバ　ソイキミダ子ヤウイコレハ

稲を刈干ぶ一ハ
ぶく好異へうゑく
ふの華をうゑ子を
ニう考ゑ考ふぶと
追とていとちかく
低まそおくをうま
あゑぶ

ひつぢハ一変刈さる
稲穂より又葉

影ーゑぶ

ものく人考ゑず

おふも毒ぬ山田とめゑゑぶ表いおぶの毒よめれぬ日ハ名

○一ダ穂モデヌ山ノ田ヲ一ウカラ番ラスルトテ　毎日ク稲葉

ノ長デキルモノ、ヌレヌ日ハスハナイ　百姓ト云モノハアヽウ

ニギナモノ子ヤ　氏ヤウヤ　ヤウスヲ上ニハ存知アル人イカ

蓑衣ハ雨やーきをふくきものこ。ま姉ふこハ考ふ人ふや

ひまふぐき毒ポトこ　ふかゑ人ふをっあて味

おゑく毒き人のトグトのおりさ毒をもよく考ろーのチぶぐき

ハ毒

ゑり。

かれる田ホおゑるひつちのゑよ出毒ハ世ををさゑふおきをそぬ

の生まるとの〻

偽正面服とさゝえ
羽ハ浮ホ加へしも
氣

○苅テシウタ田ヘ又アト人ハ手タヒツチノ穂ダデヌハ時前モモ
ウ秋ガハテタシ世中ヲモウアキハテタレバ今ヲサラ穂ヲダサ
ヤウハナイト云ウテノカイ。子秋ニ成ルトキハ
小山ヨ偽正面服と云けゞ　この白の上へ〻ろして色ハ
あゝる

ゝセいさ師

ところぢ葉ハ袖ヨ手ハれて出ル人秋ハ限りと見ん今の
○此紅葉ヲバ袖ヘコキオロシテ入レテ持テ山ヲ出テ　イニデヽ
ヤゲニセウ　人ハ定テ秋モウハヤ　シイ〻ヤ〻と云テ居ル
デエラウガサ云フテ居ル人ノタメニ

貫平ノ月ハ月ヨ高ケレ〻あれとおもやれ
谷ハバ三面川めゝぢ葉あゝるといふあをろきて
ろの松ぢゝんをよあゝ〻る

おきろゞゼ

こゝもまよう落ケ〻みの色見て秋ハゲ〻ろと云ひ〻まこる
○モヒヤ深山ナドニハ〻ダ秋ガ残ツテアルデモアラウカト云フ
タガ　ヒヤウニ深山カラ黄タ紅葉ノ流レテクル水ノ色ヲ
見レバサ　サテハモウイヨ〻秋ハシマヒニナツタト云シツタ

秋のもろこゝろを三面川ヨ云ひやりてよあゝ

今の本ヨ三面川ヨ
云ひやりてくあるハ
ロ〻〻古本ニ高

川をとゝろをとゝろべ

年ごとに見る紅葉なれど嘉川こそ名残おしけれ

○毎年ノ秋ノ紅葉ヲ　筏ヤ船ノヤウニ流レテヤル　嘉田川ハ川下ノ湊ガ秋ノ上ニル所デアラウカイ　ソヲラ湊ヘ易子テノテ秋ニアヒタイモノヂヤ　クレテ行ハノコリ多イ秋ヂヤニ

あづまぢの旅ごろもの日大井ぬくとあるゝ

夕月夜をぢくの山ま雪鹿ぬ高のうちもや秋ハくるらん

○一　ケフハ九月晦日デモウ日モクレ方ニナツタガ　アレアノ小倉山デ鹿ノナク長イ声ノキレヌウチニ　ハヤ秋ハクレテシマウテアラ

夕づく夜ハとゝくまといえん冠鮮しあり日ハ夕月秋ハ月ろまづくろろのこゝさわくなことをゝべ

まゝまたぬけをゝバ上の句ハ秋ハ月ヲ秋ハ結句のよしこ

少力

月ごとにごとりの日よある　こゝろね

乃ゝゝバ易子もゆんもとぢ葉をねさと多ゝ秋ハいまゝり

○秋ハモウ紅葉ノチルノヲ道ノ中ハ森ニテノ手ノ落ヲレテイ　ニデノ上ウタヤーサモくくリ多イ　ノ道ノ多ラ踏カラ易子テナリ上モカウ

頭書古今和歌集書院巻第五

頭書古今和歌集表現卷第六

冬部

歌〻〻ず　　中臣宗尹

立田川紅葉ながれて流れたるかな　時雨の糸の乱れなるべし

○立田川ハ紅葉ノ多ク流レタルトコロヲ見レバ　時雨ノ糸ノヤウナル　堅横ノ糸ニシテ　機ヘカケテ　錦ヲ織リタル

ハ

冬の雨とてよめる　源宗于朝臣

山里ハ冬ぞさびしさまさりける人めも草も枯ぬと思へバ

これハ上の古歌の縦横の糸とあるとハコヽを表ハしたる歌まじりの注あり

人目のかれぬるあるべしバ人めも草も枯ぬと思へバ

○山里ハイツデモサビシイガ冬ハサベツシテサビシサガミシタソイ人ノ
コヌフラ人目ガカレル上ニ行ガガ今デハタマ〳〵人目モカ
レル草モ枯シタニヨツテサ　里毎ニ人ノ行ヒ通ハレル
ヒバ〳〵ふる月じ〳〵ふる〳〵　山伏多〳〵
影〳〵らべ　もえ者〳〵ず

大空の月ひかり〳〵清クルバ新ノ人〳〵ハ山ノ
○昨夜ノソラノ月ガキツウサタニヨツテ　ツノ影ノ見エタ水ガ
ケハアレアクヤウニ　ツニ　ニコホツタワイ
○子秋ニ三の白菊ハ明神ぶし
ニ生ノ月ハとあるそのオ山さりて生ル

夕されバ夕されバ衣手寒〳〵　ことの〳〵野のよ〳〵山ハ三雪ふるら〳〵
○ハコヒハユフカタニナレバイカウ寒イ　ニツノ着ニヤナラメコレハモウ
吉野山ハ雪ガフツタリウイ
今ヨリハつぎてふ〳〵多人家ぜの屋根ハ雪ふるこの雪
○コレカラハツイテ庭ノスキラオシナビカシ
テツモツタアノ雪ノチシキ　キツウオモシロイ
ふる雪ハうぶそ〳〵ぬ〳〵しちゝひきの山の松ハ雪ま〳〵ミシ
○山ハ雪ガフルヤウスガヤガ　フルウチニハヤ所ノ方カラサキエル
サウナ　ソノ雪上ケ〳〵ルエテ　アノ山カラ流レオチル川ノ水ガミシ

テ 音ガアレ言ウチツタワ

二の川すめこぢ春ふかぐるおく山の雪げの水ぞ今ぞまさる

五のいま今アヤ

○ 武川ハ紅葉ガ流レル コレマデハ流レテノコチンダカ

ウニ流レテキタハ 川上ノ奥山ノ雪トケテ水ガ出ミタサウ

ナンデ川上ニヨドンデアツタ木葉ガ今流レテクルデヤ

春々ハ谷々の山〳〵ちらるれバひく日もミ雪ふる日ハ多〳〵

○ 武吉野ノ里ハ言山ガ出ニヨツテ イガチ一日モ雪ノフラタ

日ト云ハナイ

春ゆくハ雪ふり春きて花もさくらぶてとふ人〳〵多ルバ

冬ごもりハ春雪ふるをのこゝろ

まつ人ゼリ冬ハ

春春とてまづめる

のこる間ハ泣ると云

ふり

○ コチラ庭ハイチメニ雪ガソモツタマニ道モナイ ノミ分テ引ル

チテクル人ガナイギヤニヨツテリ 通ツテクル人ガアラウナフセメ

テ乃ハレレテアラウニ

冬のうちとくゝ少あるら 紅葉ちる

雪ふルバ冬ごもりする草も木も春ハ春とれ如何で咲ぬる

○ タヽガレテアダメモデヌ草モ木モ 雪ガフレハ 春ニハサタチシノ

花ガ咲タワイ ソウタイ花ハ春ニカテ咲クモノ外ヤニ

春ごの山こえ来くゝあるら きめわきこゝね

春雪のこゝろるるらぶ〳〵少り春ぶいとれ春咲ぬとこゝ見れ

一本このつもるらしと云ふ
ありやまさると云ふ
は雪のやうなき花どの
の言葉なればかするを
ろうじしと云ひあり
まさると云

〇雪ガトコトモナレニ タヒラニメンニツモツタレバ 本デハナウテ花ガ咲
イタ岩ヘモサ 花ガ咲タト見エル
千秋云 よし野の山ハ花の名どころなれば 春の句のことを云ひしよめるなり

大和の国にまかれりける時に雪のふりけるを
見てよめる　　坂上これのり

みよし野の山のしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

〇今夜ハ吉野ノ里ノ雪ガノカウツモルサウナ　ソレデ此ヘデカ此ヤ
ウニ　ダラヘリムカガヘリルカヤ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふみ分て入りにしと云
ハゆくさきのあとを
たどるによりて二句
くハ雑にて入りにしの

浦ちかくふりくる雪ハしら浪の末の松山こすかとぞ見る
ふぢはらのおきかぜ

〇カノ奥州ノ末ノ松山ト云所ハ古歌ニ浪モコサヌトヨンデアル所デ
名高イコトヂヤガ 今此ウ海辺ヲイ所ヘ雪ガフツテクルケ
シキハ 白イ浪ガアノコトニアノ末ノ松山ヲサコエルカト見エル
錦林云 初句を末の松山はおくりの浦とみなさるゝはいふかし
がことさらこの浦ハいづくにあれ海の浦なり

壬生忠岑

みよし野の山のしら雪ふみ分て入りにし人のおとづれもせぬ

内よりあるとこもむ
いとゞあれあるべし

源氏まあひひろ
まくふを舞まくと
ひびくろふは雪
ふりくりのこゝろ
左ゑろこゝろぞ
ひとりるあり
ゆこゝろふも
まゐいをすべし

○吉野山ハ冬ノ雪ヲフミ分テコモリタル人ガ ソノ後一向ニオトヅレモナイガ 雪ガ降ラウカウナツテ便リモシラレヌイカ イヨ〳〵無事ナガ 安ニ気ツツヨイトコロナレバモシワヅラハセヌカ アンジラレソイ

古雪のふりてつもれる山里ハすむ人さへや恋しからん

○雪ノフリテ降クラウツモツタ山里ハ サヾヤ 寒ウハアラウシ サビシウ、アラウシ サヾヤ所デハ 住デ居ル人ニデガ 心イキユイルヤウニ思フデガナアラウ 雪ハシ〳〵ハ消ルモノ ホヤガ ソノ雪ノヤウニ心ニデガ

あともろくもをくの
路ふをろろあとも
ちろハ量許あ字
を角ふくをこをを
ろう京をとをき
をとつを

雪のふるとゆてあるの 元河内ニ法ハ

雪ふりて人も通ハぬ庵の戸ハ あれや路もろく形くゆひきあらん

○雪フリニカウシテ居ル所ハ ダレ人ハ ハヤウニ雪ガフツテ 二人ドホリモタエテ 巳路モナウナツテソコ上云筋モシレヌヤウニ消テ 三ツノ道ヤウナ物ガヤヤヲ カウシテ居ル心ガ十九ヤウナ。子杜ニ三の白の。ホルやし結句のくんとれ あつひ。の線をよく味ひくもろ〳〵。

雪はふりつゝをよこけろ

清水ノ下やぶ

ををあぐくををまりの
ちりくハ雪のあるくハまホやあるくん

木の葉のこゝろ
てまれまよゝ
云

○ヒダ冬ナガラ空カラアノ如ク花ノ如クテクルハ アノ雪ノアチラハ
モウ春ガヤカレラヌ

雪の春ちりくるかなしさをあゝ

清水やき

○今ハ冬ガデヒダメモデヌアヽ未ダ思ヒダケモナイニ 枝ノ
アヒダカラ 茶ノ千ルト見ルホド上ル 雪ガクルワ

やまとのあすかやまもまだ雪のふりくるを

見るくらあり

坂上ノ雪ノ

朝ヲ明ケ方明ノ月ト見ルホドノ雪ノ重ミ

○カウ夜ノ月ワラリツトアヽ夕方ニ見レバ テンド有ル月ノ残ツタ
影ト見エルホド上ニ吉野ノ里ハ雪ガ降ツタ。子規云 朝ガ来ルノガ
ヒケハ明ノ影ノ来ル
ヒ来ル 来中来ニ月ノ影ノ
影〳〵

ゆきゝ人まつ人ハ来ず

けふゝ人まつ人ハ来ず雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ雪ハ

○此雪ハヒダキエヌウヘモ又ヒイテアリカサナシ オツケ来ガ
キテ霞ノ多ツ所ニ多ツタナラ ヒトニコソアリモセウケレ 度ヒ
ハ見ラレヽイホドニ

あまぎるハ万葉ニ天霧(アマキラヒ)合きらふなどいふ
つくもりまくて天ぐもりあひてふるをいふ
ぎるをつゞめて
きるといひこるなり
雪のふりくもるに
らるに秋雪のまじる
ハちへばのくくて
まで古言なる
す

梅の花それとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば

○［三］あまぎる 雪ガオシナメテドコモカモフツタレバ 梅ノ花ガ梅ノ花トモ見エヌ 同ジ白サヂヤニヨツテ

此歌ハある人のいはく柿本人まろが歌也

梅の花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにゝほへ人のしるべく

○花ノ色ハ雪ニマジツテ ソレト見エズトモ 人ガ梅ノ花ヂヤトハツキリトシルヤウニ セメテ香ナリトモ ニホヘ

もしの説のかぎりさまをよくこゝろえしハ秋にも色でしるこゝろを初撰の集に色雪と時と出しほどしくわく のことをあれバまことにもおもふべきをまことにるハ古言彼に

雪の中に梅花をよめる　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせば誰かことごとわきてをらまし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ雪ニマガウガ モシ香マデガ色ノヤウニツモツタ雪ニマガウタラバ 誰ガ雪ト梅ノ花トヲヨウベツ／＼ニ見分テ折ラウゾイ タレモエ見分チハスマイ 香ガチガヘバコソ

雪のふりけるをみてよめる

紀とものり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわきてをらまし

○雪ガフレバ 何ノ木モミナ花ノサイタヤウナワイ ドレヲ梅ヂ

ヤト丸金デ ヲラウゾドウモ足分ニライ
（コソヘイタス）
おへまゝ〻ゝ乃る人をまちて志ハ人の法ごゝりふよ
めるゝ
ろつね
ヨゝぐまゝこゝ氣年ハ本あれど冬ゝ枝れゝれすゝ人ハあとづれとゝだ
○コチガ一チモヒヌ未年ノ年ハモウ近ウキタケレモ 今ゝジブ
ニノ草ゝヤウニカレテヨメヘイニダ人ハ コチガコホド待ツノニ
一ダカヘツテ コヌノゝヨラズ ヲカラオトヅレモセヌ カレリトヲハ
ヨヌヘイテヨリジガヌ一ガヤウイ
ゝらめまてすよめる おまゝらのゆとやさ

論語ニ歳寒然後知松柏之後彫ト云ヒ用ヲキく事ヲ

あゝくまの年の終りまるゝとよ雪もちろゝ雪もつゝまさりゝる
○一年ノ終リニナル タビゴトニ 雪モフリ一ルガ コチガ身モ庭ゝ
又ガ一ツツテリ 次ガ二年ガヨツテイク アゝコヽツタモノ
雪平、薄さこゝいの宮の高公記
よゝ人ゝゝゝゝ
雪ツリて年の暮ぬる間ゝゝそつひよもゝぢ色松ゝ見ゝ花
○今ノデ雪ノヤウニ見ヤ間ゝ色ガカラ十ニダカ
ソレデモ一ダ咲ウヘ雪ガフツタラバ モミ色ガカハルデモアラウ
カト思フ多ガ 今ハ咲ウニ雪ガフツテモ ヤツハリ色ハカハラズニ

モウ年ガクレタカラハ　廿八トウ〜レドウ色カハラヌ松ヂヤ
トラフモコデ　コソスエタモノチレ

とうのそそよめる　さるさるちめのはるうま

服日とゝひろふとゝろうしの春ノ川流まてすき　月日こゝろ

○昨日今日明日上ニテ一日ノトクラヒテ　ツイモウ年ノクレニナ
ンヌヂヤ　アスカ川ノ水ノ早ウ流レテユクヤウニアサテノ早ウ
タツ月日ヂヤワイ

ゑのまれとむそちまて〜附まとそてまれる

きのはるめき

飛石ハ　あたとこ
うみてそのうちとつ
つゆさるハ　幸のこと
ちんどくくるり〜
くらひまぐれるハ
まれこ

ゆふべ　ハもと　夫
昨日の雑ていろ　出
雪の国時ノ賀ノ
子　康ノ日の太陽
とあまてこ　せる日
をいろ　長　ヒこ

行年のそ〜くもあるる子ゆ長殘ノ春ノ新さ人ゆ家ゆ　ゆとゝゆ
○年ノクモルニレタガウテ　次年ニ殘デ八ル新ニデガ　ツムリガキ
白テツテ面ハレワダヨウテ　此ヤウニオイクレテイクノト　ハ　サテノ
暮テユク年カ一ヤ　タレウ　ハル〜カナ

頭書古今和歌集素行本

世の言ハ八千世ひさしき
とよむべし
千代と八百と十倉
さゞのミニ訛るべう
らん代かぎりなきと
いふまでよろづ代と
いはひたりにすぎる
ニ數殺と年數と
のふかれあり
數かぎりなき砂
もて君が年ニ譬
ふる

頭書古今和歌集遠鏡巻之第七

賀歌

題しらず　　　　よみ人しらず

我君は千世に八千世にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

○コマカイ石ガ大キナ山ノ岩ニナツテ苔ノハエルマデ　千年モ万年モ御繁昌デオイデナサレコチノ君ハ

清濁
わたつ海の濱のまさごをかぞへつゝ君が千年のあり數にせん

○海ノ濱ノ砂ノ數ヲダンヾヽニカゾヘテ君ノ御長壽ノ年數取リニセウ

あるの山八旅拳の国まあるのさしたの磯八まっ分てよあるところ

出るとあれど古事記のまゝ堂記といふあるもしるの作りあるべし

あるの山さしでは磯ますむ手者君が代をハ八ますせこそ咲

○こゝの山ハ弁レデノ磯ニ住デ弁ル千鳥ノ鳴クヲキケバ君ノ代ヲ

バヤモヨ〳〵トサ学キマス

家よハひ君ろやちよふいろろそ〳〵てこゞめきてハ品ひ出ますよ

○ソレヲカ此長命ナヨハヒヲ ソコモト〳〵進ゼウホトニコレカラソコモ

トノハ千世ノヨハヒノ上ハ 此ロレヲカ歯モトリソヘテ ソコモトニ

トゞメまカレタスハ 後ニ名ヒタレクサニヒテ 家ヲカ一ラ名ヒタ弁

ツヒヤレ あなたまろしー 鈴技ヨろ〳〵

仁和ハ射傷正面服ふ七千の賀ヨひろ〳〵射の作ふ

かろしつくるふもろくふもあぐ〳〵人て君ぐハ千世すあふすもるル

朕モドウシテナリ庄共ニ長命デ居テ 此度イトホリニ又イク

家モ〳〵賀ヲイハウテ進ゼテ ソコハ千歳ノ賀ニドウゾ逢

ウヤウニシタイ〳〵カ

仁和のこゝどくはそふふ引ま〳〵ろろ射ふれをそのの

八十の賀よ者ろろねを杖よつこれりろをろ〳〵彼

此をバよ四ろてよある 傷正面服

御とぞハ古祖母あぐ〳〵おの假字を書ゞきこ

ちハやぶる神のきろ久法くかふふす年の坂もこえぬ〳〵れり

神勅ますあ〳〵人面服のよあろるあ〳〵ろ

杖ハ中ろ〳〵山坂を行る神るれバ年を行るところふ

此杖ハ下ノ方ノ物ニハ見エヌ　大カタ神ノ凡キリナサレタ杖デ
アラウ　然レバ此杖ヲツクカラシテハ　千年ノ坂ニデモ　心ヤス
ウ越ラルニデアラウト　ホハル、

ゆくすえハまちぢかくこの四十賀　ゆくすえのあるまく
しるる所まもあるる　在京業平朝臣

掛詞ちかひ　ゆくすえ　くのこと　ふるまぢ　ふげん

四十ニナリナサレタレバ　初老トヤトテコレカラ老ガコウシテ来ヤ
ガドウソコヤウニシテタイモノナレバ　ソノ老メガ来ハ　ヲソミ
マヨフヤウニ其用意ニ　掛花ヨタトヒリアウテノコラガ

負長皇子ハ佳和天皇ノ子ノ皇子ノ

飛の尾山　飛山とも　いふ大井の川のハ　ほとを落ちる

間ウ　暑ルトウニセイ　ソレタラシデ　ホクラウラノ来ハ老カフ
ミマヨウテ来テイボニ　ガナハ　万葉ニ　ヨミ　ヨミ　疑ひの
ゲナ　ハ　ゲ

さざなみのこれ　ゲのよるこれ　ゲ　大井　みゆ
あるる日　きのこれを
ひとをもとの　ひとあるゲ
飛のをれ山のいたゆをとめて落る滝のあるを　ちゆれ　ること
コノ大井ノ　ホ　飛ノヲノ山ノ岩ノ子ニソウヤイチル流ノ白
玉ヲ　千　数ハ　寿命ノ千年ノ数カヤレ　山ノ名サメデタイ

亀山ナレヤ

さゞやすのミこれきさいの哀乃五十の賀さてまろ
里乃る乃屏風ま掛のむ乃ちる者さま人のむ見
たるるくかるるとある　義系　與風

いくづくふるる月日ハおりあるで乃見てふる表ですくおき
十二月十七日ミタ〳〵るこテイ〳〵月日ハ　年イヤラスクナイヤラ　何ンボ
ムズニ乃カ〳〵ト三テクラスガ　ヒヤウニ面白イ花ヲ見テク
ラス春ハサ　キツウ日数ガスクナツ名ハル　殘枝ま表のす
くふきまやどろきそ　夜だるあ〳〵月日ハ表ろ〳〵ふるど

ろざ〳〵ハ枝を折て
羅の帽子の右ろ左
ま表ものこ

たり〳〵ハ桜の表ま
ふ乃ざ〳〵ハ松の表ハ
ち〳〵ざ〳〵

そ乃めておそ乃ろ表ま乃ろ表でしといろハクるもの
ゆとやすのミこれ七十の賀のうゝろの屏風ま
こてうきふる　きれつゝゆ表

春ガクレバ氏乃庭ヘマヅ〳〵ハンニサク梅ノ花ヲ　君ガ千年モデノ春
乃ガ表ヤトサ存ジマスル

素性法師

いあ〳〵ま乃ろき乃ろだハ表ろ表ぞ子年乃ためし表ま始ゑむ
千年モイキタ人ハ　昔モアツタカナカツタカハシラヌケンボ

俳子きしと云ふ者八
あまりうまき
めでたらんと云ふを学
ぶところの君の
ことと云ふを押へバ
神も即ちじん子
おかしらんて達
と云ふ

タトヒ今マデニハサウ云人ハナイニモセヨ千年イキルタメシヲ
君カラ[illegible]始メナサルデアラウ
将しておひおきてたぞふる万代ハ神ぞしるらんわが君のため
吾君ノ[illegible]年数ヲドウゾ万年マデモト寐テモオキテモ願
ヒマスルコトハ人ノ力ニコソ及バズ共 神ガ其ノ通リニ[illegible]ハカラヒ下
サレウウサ我君ノタメニ
神ぞしるらん八方菓子神しるさんかどある数ゆく
あるとふそうひおさあふをいわえふ常ゆいふあるあ
ことのくまハあらん。

今の平子ハつねを
りとおの世をせず
かかやまりて写
せしあるかし五
八文陸宝塚式英

蓬莱三言君の山千代子よみける
在京人さげする
清うあも千年の後ハきゝあくかあゐ人子おかせたてらん
鶴亀ハ千年ノヨハヒヲタモツ物ナレド ソレモソノ千年ノ後ハド
ウアルヤラシレラヌガ 老槐ハ千年ゴザッテモマダソノ上デハ千分ニ六
存ゼネバ フノウヘモ一ダ存分ニ生タ人ニヨウ[illegible]無事デオキマセウ
此言ハある人在京やきくなるがとらいふ
よしらねのつねありがよそちの堂々よむすめ子ら
のよく[illegible]る
そも以ちらし

源重之ハ兼信の子まる人
まて為の子貞観十
七年五月十九日に
伊信朝臣ありし
山筆経世卒とし
るまゝ人之

ある業子のかゝき
とこるをさして花
せ花の心に喜ふ

万代をまつにぞ君をいはひつる千年の陰にすまんとおもへば

君ハ万年ノ寿命ヲ待ツ千年ハソノマツト云名ノ松ニ千オイ
ハヒヤレマスル サウシテソノ千年モアル松ノカゲニ鶴ノ久ムヤウニ
ワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙リ二共ニ長ク居マセウト祝シテ
スレハサ

鑑林子つるとの玉辞 小鶴とかくそよくしくの下ま
とふ下の句ハ下を鶴すまれりと見えたり。
おいしふうこれ太夫ぬ蒼泉朝臣の平生ひる附ます
業平の息が子をくしろの扇風十いまきいそなるらむ
寿る郷ふ見るさ候こつ万代をもふ人寿静かにしらしむる

とれり
春ふ見る後のさ
まあれハ久いたく
気ありぬらはひつく
雲のあと を見ま
さきてくとゝるゆへ
とらふきまきこそ」
家隆卿の筆まて
こをいはもてて名を
挙ぐる帳家の集
あおもとして韻
の高く深く覚ます

ハ賀ノタメニカウ春日野デ 若菜ヲツミ 心ノ内デハ寿命ヲ
万年モデトオイヒヤス心我ハ先祖ハ此春日ノ神ガ
サハ納受ナサレテハ守リナサルデゴザラウ 君るるんのこと
上ふ見るがゆし

○山高み雲ゐに見ゆるさくら花心のゆきて折らぬ日ぞなき

高イ山デ雲ノアタリニ見エルアノ桜ノ花ガキツウヨイ花ヂヤ
ガ 山ガ高サニドウモアソコヘハエイカヌガ アレドウゾ一枝折テキ
タイ物ヂヤト思フ心ガ 毎日アノ山ヘイテアノ桜ヲヨラヌ日
ハサナイ

夏

めづらしき声ふるき郭公ふ時きゝこゝらの年を聞ども猶ほ初音

○イツノ年モ同ジ声デナケバナニモメヅラシクレイ声デハナイニ アノ郭公ハオホクノ年毎年変テモサテモ〳〵ヲ変アカヌ〳〵 本

おなじこゝらの詠ながら

秋

すゝこの沼れ松と秋風吹ふくふるおきの花

○住江ノ松ヲ秋風ガカヨフトイフイヒ〳〵ド オキ〳〵浪ノ音ヲ

子きゝあくさの川者之ならぶ山の木葉ふもゆ色ふかきうめく

佐保山ノ木葉モ時ノ色ガマサッテキタ 此上ホリ上ハ今マデノ二モウ一ツ佐保川ノ夢ガ多ク多ウナ

○子秋ノ夢ノ明ノ色ノ

あくまず夢ふる木

秋ノ色ハ色もかハらぬこの紅葉賀茂ぞかしこ

○秋デナクテモ木葉ノ色ガハラヌ 常磐山ノ千ヤヒヨツノ 此

山ハ紅葉ハナイニ ヨツノ山ノ紅葉ヲ風ガ吹テ来テ 此ノ

山ハ惜スワイ

冬

六帖古集 古歌 詞

の本ふも夢ことゝ

六帖古集 古歌 詞

の本ふもいとゞ

古葉 拾遺 古歌 詞

の本ふも夢ことゝ

あらう雪ハ降ノ者ハ降ノ山下風ハ吹テ来ルぞちりけるか

○此吉野ヤタリヘドコモカモ白イ雪ガフヽタ時ニハ　山ノ風デ散
ハ花ダサ黄ルワイ

春ノのうめ花なれ　ア　ら射よまゐりてよもつる

奥付義家よりうの秋歌

峰高き春日の山よいづる日の　ア　ら射るべくてらしたべらるゝ

○春日神ノ社ノ義家氏ノ中デモ弓上ヘモナイ山方ノ殿君ノ歌
ニデキマシタ　ツタ若君様ナバ　テウドシノ春日山　ムラウウチハ
レテ墨ヲ羽ノナイヤウニ　ノ行ホトヽデモ　ムモリナウ天下ヲ御
照シアソバスデアラウ　存ジラレマス

文徳実録斉衡三年閏月従四位下在原朝臣行平為因幡守ヲ云々の記あり

すゞろ八日本紙ヲ標名　嬲ヲ云ふ　すゞろとよあり一ヲ八ヶ

頭書左ノ和歌集ヲ読ヨ第八

離別ノ歌

在原行平朝臣

立ヲ別れいなばの山ノ峰ニ生ふる松ノ待つと聞こえば今ハ帰来

○今ハ此ノ歌ヲ立テ別レテ因幡ヘ下ルガ其ヨノイナバ山ノ
峰ニハエテアル松ノ名ヲトホリニ　ソトタガ此方ヲ待ツト聞
タナラ　ギキニ又カヘツテコウワサテ

よみ人しらず

すゞろ　ふく　秋の萩ハ　朝ごとに　旅ゆく人を　いつとう待つ

物語とも云ふべき所多く侍るなり
萩のやどりといふよりきて
ていすぐるハ廣の
ことなどあるさま
也流れもいとう萩
原ハこのもとに萩を
まばをうゑるのけ
しきなりてこのの
あやとなれと

○朝立テ旅ヘユク人ニ　一　萩咲テアル式秋ノ野デ今ワカレル
ガ　オカリヲバイツトゴウテ　タウゾ　ソレヤキツウ遠イ
デアラウ　おなじすぐる　きくの花うけがら〜

かぎりおきそめのよまくふるるを人とゝはまほしさ
○今カウ別レテ限リヒナイ遠イ　雪ヨリアイフノ品ハワレハ
ンチドガウレデモ　式故郷ノ人ノ事ハ常住忘レル　モナレニ名ウ
テ行ウ　チヤニヨウテ　心ノ内ハドコデモイツ　ヨニツレタツテイク
モ同ジ　ダリヤウ　身ヨリカウシテノ今別ルレ心ノ内デハ　ヨ
タチラアトヘ残レテオカウカイ　心デハツ　ダツテイクロ廿テ

おなじ道の花とゝろ〜　詩打よろ〜
をのこちぐさこころもちのくれすけふまろ〜ろ射よた
ものよあるる
たゝちねのおやのまりくあひるふるんぞろハ笑ヨとゝめそ
○ソナタノ身ノ中リチヤトゴウテ　添テヤル式母ガ心ハカリヲバ
ヨクサキノ関呼ンデモドウゾトメテ下サルナ　トホシテヤウ
テ下サレ
さぐこときのこゝはれ家よてふぢふ〜はきようふがを江
のすみふまろ〜ろ射よろ多めをを形むけ〜ろ

今日別れて後ハ
あふことかたみう

よくめる　きのうけぐ

ふるさとハ何のあやなくなどる袖やそぬらん袖の露のなき

○今日別ヒテ明日ハ何ぞ又アハレルホド近イ近江ヨリヤトハ思

（尼　カハツタモノデ別レヨイハ悲シイ　ア夜ガイカウカケ

タヤラ　袖ガ露デヌレタワイ　イワレコヤ涙ヤワイ

あ〜ハまかり〜ろ人よまとてつゆ〜〜ろ

うてる山ハ越前国敦賀郡ニアリ東ハ加賀国ニ西ハ近江ニ南ハ美濃ニ北ハ海ニ臨ミテ高サ三百丈ニ余リ周リ三里ニ余リ山ノ形ハ三角ニシテ頂ニ二ツノ峯アリ其一ハ平ニシテ其上ニ二ツノ池アリ其一ハ大ニシテ其水ハ清ク其一ハ小ニシテ其水ハ濁ル

この人ろ山あうとハ学ビ来ル者ハ必ズ来ル

○小田三ハカハル山ト云山ガアルトキナレバ其名ヲトホリニオ

ツケ　ロ無事デカヘラツシヤラウトハ思ヘド　ソレデアノ霞段

人ニテアル方ヘ立テ別レテイカレヤツタナラバ恋シカラウ

人のうまれ出ぬ前ハ何ものぞ

まれ法ろ申き

ものうまれ法ろ申

○ずりヨレ白ハ〜ハ〜タ〜ツレヤラヌウキカラ白ヤ〜恋イ物ヲ

三ニテアイカハリタアトニハ〜ヤウナコトガスルデアラウ

ろ〜だちの人ハ白ハ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ

花系ろげたる

ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜

〜まやと云なり

○別レテカラハまゝイそヲヌ〈ダテ〉久レウアハレヌフギヤガトゴ
ウユアカレチ マダカウレテ見テ居ナガラ カタ一方デハ ハヤ今
カラモウ煮シウ名ハル〈

あづまのうた〈まうふ〉人よりてつふ〜しる

いさこのあつやき

ゴ〈ども者と云ふ名ハ絶ふ人あんを君ふたぐ〈そ〉ぞ山家

○ヒバウカトゴリヲレウ名尼 人ノ身ハ二ツ二分ラレス物デ
ドウモツイテハエイカナバ 目ハ見エヌケレド 心ヲリ其方
ヘソハセテヤリたス

お坂山ハ東へトラ人とバ手ヨリこそ手を送りてこそ手〜別る〜ゆ〜山ニ森人ニこそ〜〜〜〜の神また〜〜〜〜ものとも〜〜

お坂にて人をコロレル時ふある

・ふ歌ニ人とろ〜〜〜とふ〜〜はどと云ふ。
ゆ〜〜〜と云ふ人の捨りよ〜〜〜ハハをと〜〜〜歌ふよ
〜〜〜〜

[illegible]

[illegible]

歌しらべ　よき人あるべし

かゝる衣ハ冠ばかりの事ハ有

○一出立チ日ヲバ明日ニヤト思フハ　ワレヤモウ少シ出ヌスベカリ

ワレヲバステ、オイテノ出ナサルナラバ　明日出立チヤト思フ

テハ明日ノ朝ニカヘテナラ　ワレヤモウ春ノキエルヤウニアラウ

ト存レドモ

出立ハあゝ人ばかりをあつてあるこゝまめ

小つきて年つゝすゝ久ゝ人をすてたゞ明

日あんろとばかりゝ久ゝ射よもろうしい

たゞゝとそてつゝり久ゝ

ひちへよりゝ久ゝ射よゝ久ゝのきこゝとゝふよ

こてつゝり久ゝ　霧

あさあげかゝるべき春しれまねばゝ春ぬるこゝ拙ふり

○毎日アハレル公利（キヤウ）掠ガヤトハ教マレメ　ミヅ弁イ心十六

ソレニヨロヤ存ジ立ツテ考陸（レクガク）ヘ下リマスル今度ノ旅デ

サリマス

ヨハヘーく
人のかがよぎろハ故
こぐへのくらはやど
まてるあこぐ〜

これハ高の殿ヨへ
きよりくハ侍そよ
おろかなてこそまハ
くるるなや

きのむねさぐあづまへあくりるる村より人のかが
よやどりてあくろきあくろとくあくりまし〜
右ゑれバ女のよくていぐそりるる

まこうしこぐ

えゑ右ゑぬくんくよ命おふぶ家や忘るこ名やとこぬと

○すてへハウタレヲイツぐデモ忘ハセヌトオツ白ヤルケレ尼ワレ
ハドウモいハサ エガテニセヌ ホデワレガ忘レルカ すて命ガ忘
レテドウデ下サレヌカハ 命ガヤツテイキテ居ヌナラ オツ
ツケ知レウ ホドニタメレテゴラウビヨ ワレハすてへヲイツぐデ

モウスレバスでイカ オすへハ追付ワタレヌズル忘レナサルデアラウ

ワサ

あひあうて付る人のあづまれくるるあくりる
とおくるとくくよあるる ぬくやぶ
ゑゑあるる鼻ハ人のかるる頁バ口ろくと人よ見ぬバクリ好ヤ
○光孔が今度ドホドキイ呼ヘイカ ヤツテモ 孔者ガ心
ハイツモノ光孔ノ方ヘカヨウテ コニ残ツテ居ヌバ ヒツキヤ
ウ此身ガ 今ハ別レテアトニ残ルト見ヨレルバカリ ヂヤ 心ハ別レ

ハセヌ

友のあづまあり〻る射よあるる

すゝきのこゝろ

○雲ノアチコチヘ分レテイクヤウニ　今度ハ千ムケニ進ズル時手向ノ麻ノコマカナヤウ
別レル悲シサニ
ニ拙者ハイロ〳〵ニ心ヲ分ケテ　サテ〳〵ヲイロ〳〵ニ旅ニデゴザ
ルフカナ　。イロ〳〵ニ心ヲ分ケテ　五色の絹ぞめをこまぜまぜ
つゝをとゝゝあり。
ぬさ袋をいつゝとられ。
もの〻ふはまろ人はまきそつゝ〻る

すゝきのこゝろ

○ハルカニ雲ノイク〻ヘモヘタツテアルアナラノ山ノアラウヒモ　拙者
ハ雲ノ事ヲタエズ思ウテ居ヤウ　ホドニ　タトヒ雲ハ分レ
モ　心ハ分テカヨヒヤルナヤ
人をとられる射よきゝる
ゝられてふをハ色にあらはす
○色コソ物ニシミ染ナレ　別レトテ一ハ色デモナイニ　ドウシテコヽニデ
ハヤウニ心ニシミ〻〻トツラウ思ハルヤラ

この玉ハ越前と
いふところのうハの加
比美山あれく

あひあれうなる人のこれ玉まおろして年へて系
まゝうできゝ又ろうなる附よめる

九月四日能登

○ヤ波ノ又下ノ方ニヤルまニアル方ハル山ハ ヨソヘイタ人カ方ルトニ
名ガヤトモリタニ ソノ方ハル山ハ イロンヤクニタツコヅ サツノ方山
ガ有テモ アルカヒハブイ アルカヒトニハ クラブリデ来テモ
系ハ居上マラズニ 又アチハ方ハルトニハ名デコヅアし

この玉へまろうなる人よりてつかハるる

あゝ山ハ越前ヨリ
ア

ばかれんとおもものとし
おぼゝろ〳〵ゆきそてた
ゆく〳〵ゆきとおてさ
我をしおやすうさ
ずの声きひろ〳〵
ろまゆきとくまか
ろとハいもで附まま
のこまかせろ〳〵

よそふのこと〳〵ゆきろ〳〵ゆ山のやきろ〳〵まゝゆ家ハ
○今カラハヨソニバカリオナカウ月日ヲタテル
デゴザラウカ アノハ山ハ系ツテ目ニカラ山ハ白ハヒヌ
ガ身ナバ やきゝ〳〵ろとつあとを白山の雪をろる
とのひろけたろ
おとゝ山のやとろ ゆく人をろるこゝくよめる

つゝやき

おとハ山こぶゝ〳〵ゆて附ゆこゝをゆ惜むゆゝ
○コ手トハ山ノ上ノ木ノ上ニテアレホトヽギハガ上ノ鳴キマス

人のさまをくしたるを
ねたみうらみ人をうの
ゝしりそしりさまざま
ゝ

ぬしハ秋のつゆをれを
をしむ人ハ人のなみだ
をそしりとをねて
ゝ

郭公モアノトホリ啼テ来ル所ノ別ヲナゴリヲシウ思ウテ
アラウサウ安元　拾者ドモ　唐ニ人殺ニ係ル者アリテ西ヘ
ぎハ〳〵のちちらげがゝ　おのゝひゝふゝ月乃
つごもりかゝふまろうゝるまゝ人のおれこども
さけたうびゝるつゝぐゝふゝある

ふぢなみのゆねめち

かゝるまゝふの啼てゞめよきゞゝ秋のゝれハ惜くやおもぬ
○上もゞ啼ナドウヴオトメヤセキリゞスヨ　今ハ秋　別レノ
時分ニオリカレヤスハコンボドナゴリヲシイニソイハナゴリヲ

シウハナイカイ

平めとあり

ぬ者のこゝろすゝ之出てゝれあハれぬゆひよこひやゝろうん
○アノ者ゝ啼ヤウニ半ば乗ニ立テ出テイカヒヤツテハ別ヒヤダ
ナラ　ワレハ今カラハアノ者ハレヌヤウニ　ゆガハレヌ　イツモオナジカ
シウ物ヲテタテルデゴザラウカイ
涙さねがほゝ〳〵ゆあこんさくゝまろう乃ゝ射よや
まぎきふゝくゝるめ之をゝ乃ゝこゝろ之ふゝくゝあある

ちろめ

ちろめハ大和ものゝ
ゝうよ涙の袖ぬむ
すゆ又ハ思ひ口
北堂女ありとゝ

命ぐふんようあふあ〜ばかりうられのかな〜うらあ〜

○命サヘンマカセテナツテ　死ナズニ居ラルヽモノナラ　ナニガサテハ別レヤスガコレホドニ悲シカラウゾイ　人ノ命ハ帰リノ時分デノコトモ知レヌニヨツテサ　悲シイワイ

山さきより神子るびのをうまでおくりゆんまうり

てうりぐくよしてあれをこゝるまあめる

まあもとのぎね

○人やりのあるあ〜ばくふ大うこハいきうしとあひてぐ帰りまん

○人ヤセル様デハナイ　様ノガライク様ヂヤニ　タイガイナコナラモウイキトモナイトエテ　ドレヤ女ラウゾ

いまハこれより四ツ　ねこさねごいひるをうまあこ

ゆう

養系うね　めち

きこれてきあ〜ん　の身ゆ〜あれバうるき数ハ　ハ乃も者〜れ

○ドコマデモイツシニイキタイ　ナレテコレデデキタ心ニ著ニ

アル我身チヤニソノ人ガドコマデモ　招ニツキソエテノ系レバ

コレカラ逢ルトキニハ　身ハ心トハナレテ心ナイヌデカラヂヤニヨ

ツテ　カリニ十二ハ乃モエレリトセヌ

養系これをぐむ〜のすけまうりる附るた

おうの人ことこともふといふまことよれり

ろくハ和ぎろの名
よおく〳〵相ゐうこと
ハあゐと別の名ニ
用ゐるこう

ぐうよ坂と云ふ所をこゆるこゝよりくだる

法こゝめき

ゆうとゑてゐれも行くあふ坂をくんだのあるゐやまこそ
有名れ

○此坂ハ逢坂ナレバ入ニ逢ウズチヤニ　此坂ヲコエツソレテ〳〵ア別レ
テイカシヤルトカ　コレデハ逢坂ニスル名ハ　拵モレサウニ受エテ
拵ミキフノメサ名ヤヤイノ　コガ人タノイトニモノチヤ　人タイト
ハ人ニ拵モレヒゐハセテオイテ　ソレテ其通リデモナウテム
ダナ事ヲ云ヒマス　。千枝ニろとハ逢坂をこえまるゞ。ろロ
とまゞハこゝもとよ　れゆくゝとゐるこゝをゐゝ　ゑしゐるこゝ
ゐこゝとゞあり。

仕官の人ハ拵ナ行
ゞこゝきあるまこゝの
時ゝのゞこゝてひ
ニスよりこゝゐゐこゝ

石山ゝこゝやこの東
の方ゝ行ゝ遍照
のこゝ寺ゝ住れゝニ
とゝよゝこゝ
ちの名ハ元ゝ
ゝこゝ

おもえのちふるゝ人ゝ　ゝこゝうゝゝこゝゐゝ
ゝこゝよゝゐる

菱系ろゐすけの朝臣

○ゝ拵イトラツレヤルハ　ゝ我者ハ案内ナレバ　白山ニ
トヨリイイ　越作雪ノ深ゝ　ゝ雪ノ深ゝ　ゝ拵イトヨ
シテイカツレヤツタツノ雪ノ跡ヲタヅネテ拵者モアトカラ
ラウ

人のゐ山よまこゝできゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝこゝ　ゝ　ゝ　

[illegible]

タヽれの籠ハ山と又ゝあるんよりもやこえんもと[illegible]

○タガタヽ上ヶ延々マガキハ山トヲエレバヨイニ サウシタチヲ 夜ルハ心

ウモ山ハコエラレマイトカウテ アノイヌ人モ コヨヒハコヽデ[illegible]

ルヤウニ

山よのぢりてクりまつてきて人々おれ〻ら法ひ

でふしめる

[illegible]仙法師

つまゝれをバ山の桜ト海人せゝらんこめんと来ばハなのまゝ〳〵

○リヤノカウハ別レヤスハキツウ心残念ナガ ヒヨテ拾僧ガナン

ボヨちくヤレタトテイトヽリハナサレヽイホドニ コレハナンデモコノ

[illegible]

比叡の山の全利舎

ま手林院の白ま

のぢりのみかくう人

[illegible]

金剛利舎のとう二代

実秀の自筆ハ年

六月十くゝ

山桜ニウチヽカヒテ ヒメウヒトヽメマイヒ アノ花ヒダイニ[illegible]

ウイ すくガタモヨモヤ アノ花ヲアリモギツテ[illegible]

ルマイウサテ

うつもんのこヒ[illegible]利舎ヨ山ホのぢりてうイ

ルうま桜のなのあまてあめる

信正アんぜう

山風ヨ桜ゆ[illegible]

○山風ニ桜ノ花ヲ吹巻テチリミダレヨカシ ソレタラ此花ノチリ

ミダルルノニギレテ カルヒガガレヌトエテ 君ガオトマリナカル

ヤウニ

ぴと形くバ君とあるべくふかハ子ん久ぢハおもうら死さやハあくぬ

○一トテモ足ずの三笑ノボーナバ　君ハ残リ者ウ名ニテナミヨリ事ノ

ヤウニ笑イ　タガヨイ　つレ三君ラオカヘレキハハ　花イキコエヌノデハ

ナイカ　花ノキコエメノデヤウサオカヘレヤカウヤウハナイ事デ

結句又　花ヨノチガタメニモウイフデハナイカ　つチガタメニモウ

イフギヤツリテ

仁和のこうぞ　みぞふおもしーまーるる所よりこの

蓮仙法師

新古歌集の里、西山でしとしともる内レ

度ありこ〜

滝ならんぐふおれ〜流して久りみひるるふよある

蓮蓮法師

あぐしてあるる〜涙さきふるふみよさるとやトハ久ゆらまる

○ノコリ多ウテハ別レトス　拾遺カ此涙ガ滝ニソウテ流レル

コレデハ川下デハ　水ガさレタトアエルデ　ナエラウ

ゆむまるのつぎ下よめ〜たり日おるくきまるぐ

たるづく西のいさりハ月ハ　ハウおきりまで待り

てあるり出ぬるるるるよるづきぬるるりて

法ろ四き〜

六帖のさろきと

とうてこの命ある

ハうはこの王ハさろ

づきをきんぐ〜

ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ

ぐろうあも物七天

のの小いろとふき

さよまて杯ハさもと

あり

秋萩の宅ばゞ或はぬるゝやどる露をばおもてをとこそ聞へ

○アノ萩ノ花ヲコノ雨ニヌラレテシヲラカレテシマウノハ　トシノ惜ウ名ヒマスレバ　一ダウレヨリモ老ノ身雨ニヌレテ露ノ花ノ名残ヲシイコヂヤト存ジラレマスワイノ　一ヤ上ニヒトシアクリ一セ　ソノウチニ或モヤミ一セウカサニ

とよめり久しく　兼俊王

あだれは秋の雨ぞ
ふるまれはうくまゝ
て雨の初はこそ人
うう

とゝもゝん人の名をとゝゝぬまゝ小秋の雨にぬれと身ふりふける

○ソノヤウニ別テ惜ンデ接者ヲハ除切ニ思ウテ下リレシノ人今日ニデ茅ニモ存ジナ　サウレタ老ノハ志ヲマタ存ジナンタウチニ　接者カ身分　萩ノ時雨ノ上ニヤウニ　雨ノ

ツテモウラチノアカヌ物ニナリマシタ　一ソウト早ウ若イヨウナ事ヲ知ツタラ　別レテ大変ニゴザフウニアク残念ナ

ねゝこのおやきミ小むぐらのうちにふれは
萩ハ　ふるる

ふるれどうれしくもあるゝ二度ひまる逢ぬさきの小雨と思まく

○ソノヨトスハナゴリヲレウハアレド　サテ〳〵ア姫レイコカナ　ナゼニトヤスニ今夜ヨリサキ　イマダ近付キニナラナ二タウチニハ　何ヲオナツカシウハ名ヒマセウゾ　今夜始メテハ近付ニナリテシタシ

ものをとヽ
ぬ
ぬ
ぬ

バコソ　ウ別レヤスナレ　スレヤ別レノ苦ゴリヲレウ名ハレル事ニ成

近ク二ツノ所ガ　ナボウカ姑レイフヂヤワサテ

歌　しらべ

あこがれそめる神の恋人ハ　ちらす形見とつゝこそぐゝく

○　ムリ多ウテ別レル神ノ涙ハトンデ玉ヤウニ落ルガ　此玉

ヲバ　ヌモトノ形見ヂヤト存ジテ即チ此神ニツヽンデ身ニ着ル

クギロ　ちく　ウ涙　ちる　ハ　神ハ　ウ　ウ　ハ　ウ　ハ　ウ

○　山別レヲナボウガ悲シウ名ウテ　此ノ涙ニ沈ミ

メレタコノ神ハ　又逢フ日マデ　ハ　ナボトムニ　ノ　ホド

この歌ハ旅の人の
さハやかなこゝろとも
やさしき表ハいろ〳〵
てゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
こゝろも所よりとよせ
てくるびゝろハ偽る
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

あひて　ハ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

悲シウ名ウフ　チヤニヨツテ　イツマデモ忘レラマイホドニ

イツヲ限リトスル　モナウ泣テヌラスデアラウニヨツテサ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

○　コノ春雨ハ　トテモフルホドナラバ　ソノウチニソイツヨ

ウフツタガヨイ　ソレダケ　此雨ヲイヒタテニシテ　名レテイク

君ヲトメウニ

あひて　ハ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

○　ナボトメテモトマラズニシヒテ　名レテイク人ヲトメウニ　桜

花ヨ　道ヲシレヌヤウニチリヌヂデ　ドガ名ヂヤトヤ人

ノ逆ラテエカメホドチジテクレイ

あづの山こえあくいゝみのあとおてあいひろ人

のろれろもりまある

佐ゝやき

むらぶまの あづさよ濁る山の井れあてそ人よ忘れぬるろ乳

○ 接体コヤウナ山ノレミヅハ 浅ーモヂチヤニヨツテ 飲ウト

ムウテノスクヘバ ソノ手カラ落ルヒヅクデチギニ濁ルニヨツテ

オモウドウニスクウテノヽレヌ飲ミヌモノチヤガ ヲウド

ソノ通リニ サテ〳〵マア残リオホーニアノ人ニワカレタコ

和ヒひつきてハ入ー
てろの車おかの
をいそこ

下の第八段末の
下ナ流ヤ流るカの
細を流ウ〳〵ヘ手を
細とるとうしくそイ
さそ一れををぐ
てくすの第ことろ
ろとぐ隔句体ノ

十カナ

乃ようあくり乃る人のくるまをおを以つきく

ロろれ乃るこニろまそよえる

ささもの

下の第九ハ段ハ

○帯ヲスルニ ウヒロハアテタ所デハ 端カタ西方ヘワカレル

ケ尼 前ヘマハレテムスブトコロデハ ヌイキアウモノチヤ

ガ ソノ通リニ今ライク所ハカウベツ〳〵ニワカレテイクトモ

マタソノウチドウシテナリトモ 出合ウワサテ

頭書百今和歌集素養抄